

Les Œuvres de Terumasa Kojima

小島輝正著作集

I

全小説集



小島輝正著作集刊行会

浮游社

小島輝正著作集

I

全小説集



浮游社

小島輝正著作集 第一卷
全小説集

一九八八年五月五日初版発行

著者 小島輝正

発行人 小島輝正著作集刊行会

発行所 (有)浮游社

大阪市天王寺区石ヶ辻町三一〇 宝栄ビル四〇四号
電話(FAX) 〇六・七七二・七六七二

ブックデザイン 倉本 修

写植組版・(有)新弘社／製版・印刷・大阪出版印刷(株)／製本・山田書籍製本(株)

定価 一三〇〇円

落丁、乱丁本は送料小社負担でお取替え致します。

目次

友だちの話	7
調査の話	21
黒い河	39
・初期小説・	
ある過程	125
事業家	139

壊滅への中間駅

159

巴渦

191

殻

207

光芒

227

貪婪の子

261

かへりみず(未完)

293

解説

越前谷 宏

319

小島輝正全小説集

友だちの話

Sと別れてからも十年以上になる。しかしSの顔や体つきをぼくははっきりとおぼえている。もし今、彼が生きていて、どこかでたまたま逢ったとしたら、それがたとえどのような思いもよらぬ場所であつたとしても、ぼくは一瞬のためらいもなく肩を叩いて彼の名を呼びかけたことだろう。いや、別にここに書くようなことが特にあつたからではない。それだけでなく彼のあの特色のある風貌だけは、いつまでもぼくの記憶に残っていたことだろう。

ぼくは小説書きではない。人の容貌や体恰好をことこまかに描写するというのは不得手だし、余り気も進まない。それにそういうこまごましたことを書けば書くほど、それは実際のSから遠ざかつていくことだろう。だが、こんなことを書き出した以上、彼の風貌に全くふれないわけにもいかぬ。一通り書いておこう。

まず甚しい近眼である。あのアメ色の太いふちの眼鏡は、どう見ても四度や五度より弱くはなかつたにちがいない。その奥の瞳。それは分厚いガラスの下で、近視の強い男の常として、いくらかたび出して見え、すこしうるみをおびていて、臆病な小犬のそれに似ていた。それに顔がひどく長い。本当に、ひどく長い、とでもいうほかはないほど長かった。その上その長い顔の色が奇妙に赤い。そ

れは夕方の日射しを浴びた煉瓦のような、一種独得な赤だった。ああいう皮膚の色をした人を、ぼくはほかに見たことがない。

背は、そう、五尺八寸はあったかな。そのくせ体重は——これはSをふくめてぼくたちが勤めていた役所の同じ課のものが潮来に年末旅行をしたとき、五尺二寸足らずのぼくとならんで宿屋の風呂場で裸で目方を計って、そのぼくとほとんど変らなかつたのでよくおぼえているのだが——十四貫たらずだった。その五尺八寸、十四貫という、特別詭えのようなやせたひよろ長い体を、そんな体つきの東洋人の常でいく分前かがみにして、これも人より眼立って長く見える、のど仏のひどくつき出た首を斜め前に突き出し加減にして、一足ごとに膝関節がぎくしゃくするような、自分でも長すぎる足をもて余しているような、足どりで歩いているところは……そう、ぼくたち同僚が彼につけたアカリン、という仇名もそこから出たのだ。アカリン、つまり赤いキリンだ。

その仇名がついてからは——それは彼が新しくぼくたちの課に入ってきて一ト月とたたぬうちに、それも実はほかでもないぼくがつけたのだが——ぼくたち若い同僚はもちろん、課長や、しまいには年のいかぬお茶くみの給仕や女の子にいたるまで、彼のことをアカリン君とかアカリンさんとかいう呼び名以外では呼ばないようになった。本人の前で大っぴらにいえるような、いつて見ればまあ愛嬌のある仇名で呼ばれて、一々腹を立てる人もいまいが、彼の場合は、いやな顔をするどころか、そんな仇名のついたことが自分自身でも面白くて仕方がないといったような様子で、にこにこしていた。その彼の笑い方がまた実に特徴があつた。大たい彼の顔の輪廓そのものが……しかしさっきもいったように、これ以上こまかいことを書いても仕方があるまい。要するに彼は赤いキリンさんだったのである。

つまり、子供の漫画などによく出てくる、いつもつんつるてんの服を着せられた、あの愛すべきキリンの一匹をみなさんは想像して下さればいいわけだ。

さて、ついでお願ひしてしまおう。風貌ばかりでなく、彼の心についても、あの子供漫画のキリンがいつも發揮する小心さと善良さと、そしてそれに伴う幾分の滑稽感とを彼Sに想像していただきたい。こんなことをいうべくとSとのつき合ひは、実は、彼が役所に入ってからしばらくが昭和十七年の秋にその役所の外地の出先機関に転勤になるまでの、ほんの一年足らずの間だった。しかし、たとえ一年足らずの間でも、同じ役所の同じ課につとめて毎日毎日顔を合わせて同じ仕事をし、ときたまは一しよに酒ものみ、二、三度は一泊か二泊の旅行に出かけた男同志ともなれば、およそ相手の人柄はわかる。そして、その一年足らずの間、アカリンさんが気の弱い、至ってお人好しな、子供のような明るさと無邪気さをもった人であることをちなりとでも疑わせるような彼の言動をばくは一度として眼にし、耳にしたことがない。大体が無口である。ときたまお酒をのんでも、特に口数が多くなるわけではない。ちょっとおちよほ口でビールをのみ、そのビールの泡を口のまわりにつけたまま、細い長い指で丹念に一つずつ南京豆をつまんで、口にいれる。もちろん酔って大声を出したり、人からんだり、暴れたりすることはない。かといって、一人で寝てしまったり、人より早目に酒席をきりあげたりすることもない。大ていのときは、しまいまで面白そうに人の話をきいて、結局は誰か酔いっふれた仲間の介抱役にまわって、塩水をのませたり、背中をさすったり、大丈夫かい？ 送ろうか？ などといったり、ときには本当に送って行ったり……親切な男だった。

一度、同じ課のものが揃ってした旅行のとき——それが前に云った、風呂場に古びた台秤のおいて

あった宿屋のことだったかどうかは、はっきりおぼえがない——そのアカリンさんが、歌をうたったことがある。例の、オ次ノ番ダヨ、オ次ノ番ダヨという、気の弱い無芸のものにとつては甚だ残酷なりフレーンに八方から追いつめられて、アカリンさんは、あの煉瓦色の顔をますます赤くして立ち上ったのだが……。その歌の節廻しも、文句も、今ではほとんど忘れてしまったが、それは彼の口から以外は、あとにもさきにも一度も耳にしたことのない歌だった。Sの生国はたしか山陰の奥津温泉に近い山国の僻村だという話だったから、おそらくそのあたりの土地に伝わった民謡でもあろうか？ 日本のどの民謡にも似た、哀調をおびた、単調な節まわしで、何でも、山の中で鹿が獵人に鉄砲でねらわれていて、その鹿が、もし自分が殺されたら後に残る妻や子はどうなるのだろう、と思つて泣いている、というような文句だと記憶している。どこかと似た、ひょうきんな味の中に、妙に哀れっぽい身につきまされるような所があつて、流石に口のわるい悪友たちも、無理やりに歌わせた手前もあり、かなり長いその歌の続く間、みな妙に神妙に静まり返つて謹聴したものだつた。それも一度だけである。

アカリンさんは、その頃二十六、七で、まだひとりものだった。そんな風で、自分の身の上話など進んでする方でもなし、それにそんな調子で誰にも好かれるけれども、また誰にもすこしずつ見くびられ、遊び相手としても、真面目な話しの相手としても、何だか物足りない、いわば頼りない相手とみられていたので、ぼくをもふくめて同僚たちも、彼の家庭のことや経歴や、要するに私事について深く立入った話をしたものはないようだ。何しろ、酒の席などで、女たちを前にしてはくたちがずけずけとワイ談をしたり、露骨な冗談をいったりすると、あの長い首をちぢめるようにして、うつかりするとそんな話の続いている間中、下を向いて南京豆を一粒ずつもそもそつまんでいかなない彼のこと

あったから、まして彼を相手に色恋や女の話を、立入ってしまったものもない。役所の女の子なども、ほかの若い男性にはきけないような遠慮のない口を彼にはずい分きいていたし、アカリンさんはまず大袈裟に言えば、自分たちの恋愛や結婚の対象になる可能性のある若い独身の男性としては、彼女たちの意識には上っていない様子であった。いつてみれば、アカリンさんは、誰にとつても、まずいてもいなくとも同じな、ただ気楽でからかいやすいお人好しの同僚、ひどくいえばみそつかす、ただしこつちが困っているときは親切に世話をしてくれる便利なところもあるみそつかすだったのである。

少なくとも、その頃まだ学校を出て間もなく、いわば一番鼻柱の強いさかりの、ただでさえ役所の同僚のどの一人をみても馬鹿に見えて仕方なかったようなぼくにとつては、このようなアカリンさんの存在は、文字通り、兎や狸や熊や猿の中にまじって総身に智恵のまわりかねるような、間のぬけたひよろ長い図体をもてあましている漫画のキリンのような、毒にも薬にもならない、ありていにいえばまず眼中におく必要のない存在であった。今、ぼくが、自分の若年の不明をはじる気持と共に、ありのままに言えば、何のために生きているのか分らない軽蔑すべき存在だったのである。

そんなわけで、ぼくがさきにもいったように、昭和十七年の秋南方に転勤するとき、課長が同じ課のみなと一しよにぼくを呼んで自分の家で送別会をやってくれたその晩のことも、もし、その後のことがなければ、ぼくの記憶には残っていなかったかもしれない。その晩は、例によつてどんちゃん騒ぎ、唐紙が破れる、床の間の生花がころげる、手あぶりの火鉢がひっくり返る、はては二人ほかのびてしまつてそのまま課長の家に泊りこむ、という有様だったが、さすがに十二時近くなつて、いよいよぼくをもふくめてみなが帰らねばならぬという頃になると、そこはやはり同僚の一人を遠い外地に

送るといふ人なみな惜別の情も手伝つて、何となく座がひそまり、玄關を出る頃には、一人一人が妙に酔のさめた白茶けた顔色になり、変に馬鹿丁寧な別れの挨拶をして、それぞれ自分の家への都合のいい所でよくと別れの挨拶をして、それぞれ自分の家への都合のいい所でよくと別れていった。そのとき、結局よくと最後まで一しよだったのがアカリンさんなのである。よくの出発は、その頃の常で船の出航日が秘密になっていたもので、あと数日のうちとは分つていてもはつきりとは分らず、みなはその晩を最後ということにして、駅や、まして港へは送らぬことになつていたから、結局よくの同僚の中では、アカリンさんがよくと一番最後に別れることになつたわけだ。

十一月も半ばすぎの東京だから、真夜中すぎの郊外の夜道はかなり肌寒かつたようにおぼえている。よくは、出発が明日かも分らないので、余り酔うわけにも行かず、それに役所以外の友人や親せきの送別会続きでいささか疲れもし、おまけに出発にそなえてその前の日につくつたばかりの新しい眼鏡を、その晩のどんちゃん騒ぎで酒癖の悪い同僚の一人にからみつかれた拍子にとばされて、また運悪くそれが火鉢の中に落ちてセルロイドのふちがきれいにもえてしまった、というようなこともあり、かなり遠い郊外電車の駅までをアカリンさんと歩きながら、段々自分でも不機嫌になり、口をきくのも億劫な、重苦しい気持になつていった。それに、その年の五月には例の大洋丸の事件もあり、その頃の南方行きはそろそろ不測の危険が伴つていたし、その晩もそんなことでみなにひやかされもし、いくらかは本気で心配されもし、自分でもすこしは出征の前夜に似たような不安と、生れてから住み馴れた都会をはなれるいささかの自分だけの感傷もあつたりして、何か一向に落着かぬ心地で、ただ、終電車にのりおくれぬように足を早めて歩くばかりで、その十五分ばかりの二人だけの夜道の間、ア